

看護学生のアロマセラピーを用いたボランティア活動の学び －病院での患者と家族への関わりを通して－

小濱 優子¹⁾ 中村 滋子²⁾

要 旨

本研究の目的は、看護学生が企画・運営したアロマセラピーのボランティア活動に対して、その体験からどのような学びを得たのかを明らかにすることである。方法は、質的記述的研究デザインである。アロマセラピーのボランティア活動に参加した看護学生7名を対象とし、「ボランティア活動で学んだこと」について、無記名自由記述方式で調査し、意味のある文章のまとまりをコード化、カテゴリ化し、質的に分析した。その結果、「学び」は、【コミュニケーションの学び】、【相手の反応を観て対象を理解すること】、【相手に合わせた環境への気づき】、【ボランティアの意味への気づき】、【自己の看護への動機づけ】の5つのカテゴリに分類された。看護学生は、手を用いた“触れる”ケアを行うことによって、対象と相互に癒される関係を築くことができた。また、ボランティア体験を通して、チームの一員としての責任感を自覚し協働作業の意識向上に繋がったと考え、看護学生の自主性や社会性を育成する意義ある学びの体験であったと考える。

キーワード：看護学生 アロマセラピー ボランティア活動 学び

はじめに

厚生労働省のボランティアに関する調査結果によると、国民の約6割がボランティア活動への参加を希望している¹⁾と報告されており、国民のボランティア活動への興味関心は高い傾向にある。ある看護大学においては、約7割の在学生在がボランティア活動の経験があるとのデータが示されており²⁾、将来、看護職を目指す多くの学生達がさまざまなボランティア活動を体験してきており、看護学生のボランティア活動への参加意識は非常に高いことが窺える。

過去5年間の看護学生のボランティア活動に関する実践例を検索すると、被災地ボランティア³⁾や緩和ケア病棟におけるボランティア⁴⁾、地域の高齢者⁵⁾、障害児⁶⁾等へのボランティア活動が行われており、多種多様な対象へのボランティア活動が盛んに実施されている。看護学生がボランティア活動に

参加することによって、心と体の健康や人とのつながりに対する看護学生の思いが変化し、その意味を再認識した⁷⁾という報告もある。看護学生にとって、ボランティア活動は、人々との交流を通して対象をより深く理解する体験になると考える。

A看護短期大学のホリスティックサークルのグループは、平成25年度からサークルの地域貢献活動の一環として、B病院内の交流サロンにおいてアロマセラピーのボランティア活動を行っている。ボランティアの対象は、B病院に通院する患者や入院患者、およびその家族である。初回のボランティア活動では参加者から概ね良い評価が得られた。翌年、平成26年度も再びB病院のサロン担当者から同サークルへボランティアの要請があり、サークル学生が主体となってアロマセラピーのボランティアを企画し運営することができた。教育者が、看護学生のボランティア活動など、教育カリキュラム以外の活動状況を把握することは、教育活動の一端として重要なことである。過去5年間に於いてアロマセラピーを用いた看護学生のボランティア活動の先行

1) 川崎市立看護短期大学

2) 川崎市立看護短期大学（非常勤）

研究は見当たらなかった。そのため、看護学生がボランティア活動を通して何を学んでいるのか、その意味を明らかにすることは、教育上、意義が大きい。今回、アロマセラピーのボランティア活動に参加した看護学生にとって、この活動がどのような学びの体験となったのか、明らかにしたので報告する。

I 研究目的

本研究の目的は、看護学生が企画・運営したアロマセラピーのボランティア活動に対して、参加した学生がその体験からどのような学びを得たのかを明らかにし、このボランティア活動の意味を考察することである。

II 用語の定義

1 ボランティア活動の原則と本研究におけるボランティアの定義

日本におけるボランティア活動とは、「自発的な意思に基づき、他人や社会に貢献する行為」⁸⁾を指す。主な原則は、一般的には、自主性（主体性）、社会性（連帯性）、無償性（無給性）、創造性（先駆性）の4つの原則⁹⁾にまとめられている。創造性（先駆性）という概念は、ボランティアが既存の社会システム、行政システムに存在しない機能を創造的な発想で補完するという役割を担うことから発生した。

本研究におけるボランティア活動を、「看護学生の自発的な意思に基づき患者と家族に貢献する行為」と定義した。その行為は、看護学生の自主性、社会性、無償性を有し、対象病院の医療行為には存在しないアロマセラピーを用いた先駆性も含む、ボランティア4原則を満たす活動である。

2 アロマセラピーのボランティア活動の『学び』

『学び』は学習と等しい意味で用いられる。一方で『学び』を学習よりも主体的かつ人間的な営みを含む意味合いで用いられることも多い¹⁰⁾。

本研究では、看護学生が自主的に参加したボランティア活動によって得た「気づき」、「関心」、「思い」、「身体感覚」を『学び』として抽出した。

III 研究方法

1 研究協力者

A看護短期大学3年課程に在学中の1・2年生のうち、アロマセラピーのボランティア活動に参加した看護学生9名。そのうち、研究同意を得られた7名を対象とした。

2 研究期間 平成27年7～10月

3 データ収集方法

研究デザインは質的記述的研究である。ボランティア活動に関するアンケート調査（無記名自由記述方式）を行い、学内に回収用のBOXを設置しアンケートを回収した。アンケート記入用紙はA4サイズ1枚とし、その【問い】は「アロマセラピーによるボランティア活動に参加して学んだことを自由にお書きください。」とした。

4 データ分析方法

分析手法は、意味のある文章を一つのまとまりとしてコード化し、カテゴリ化を行い、サブカテゴリ、カテゴリに分類した。データの分析結果の信頼性を確保するため、質的研究の経験の有する複数の教育研究者が検討を十分重ね、データを分析した。

5 倫理的配慮

研究協力者9名に対して研究の趣旨及び研究協力についての説明を行い、研究への同意を確認した。研究代表者はボランティア活動に参加し、必要時、学生支援を行った。そのため、研究依頼の説明は、研究代表者以外の者が行い、研究協力者の負担とならないよう配慮した。アンケートは無記名方式とし、個人が特定されないよう配慮した。アンケートの提出をもって研究同意を得られたものとみなすことを伝え、回収用ボックスを設置した。研究への協力は自由意思に基づくこと、研究の途中で拒否することも可能であると説明した。

なお、本研究は川崎市立看護短期大学研究倫理委員会の承認（第R57号）を受けて実施した。

IV ボランティア活動の概要

平成27年3月某日、A看護短期大学のホリスティックサークルの学生が、B病院の要請を受け、

病院内のサロンにおいてアロマセラピーによるボランティアを実施した。B病院の外来患者と入院患者、およびその家族を対象として1人約15～20分のハンドトリートメントを実施した。B病院のボランティア担当者が、実施日から数週間前から、病院内の掲示板にボランティアの案内のポスターを掲示した。学生は、当日集まった希望者約20名にハンドトリートメントのケアを行った。学生は、事前にアロマセラピスト（日本アロマセラピー学会認定看護師）からハンドトリートメントの方法・注意点を学び、安全に実施するため練習を行ってからボランティア活動に参加した。

ボランティア当日は、アロマセラピストであるサークルの顧問が学生をサポートし、サロンの責任者であるB病院の医師の立会いのもとで、対象者の安全に配慮しながら行った。ハンドトリートメント実施前に、参加者の同意を確認し問診票に現在の体調について記入してもらった。また、同時にアロマオイルの簡易パッチテストを行い、皮膚炎等のトラブルがないように配慮した。

V 研究結果

アロマセラピーを用いたボランティア活動に参加した看護学生の「学び」を内容分析した結果を表1-1)、および表1-2)に示した。看護学生の「学び」以外の記述内容はデータから除外した。「学び」のコード数は58であり、13のサブカテゴリ、5つのカテゴリに分類された。以下、カテゴリは【 】, サブカテゴリは〈 〉で示す。

1 【コミュニケーションの学び】

このカテゴリは、〈リラックスが与える言語的コミュニケーションへの効果〉、〈対象に触れる・集中する非言語的コミュニケーション〉、〈緊張がほぐれ相互に癒される感覚〉という3つのサブカテゴリから構成された。

〈リラックスが与える言語的コミュニケーションへの効果〉

学生は、「リラックスしたことで普段より饒舌になった方も多い」、「実習よりも短時間で深いコミュニケーションがとれた」と感じ、「患者が自ら話してくれた」という体験をしていた。また、「医療従事者でもアロママッサージのプロでもないことで、患者は話しやすかったと思う」と感じたが、一方で

は「自分自身のコミュニケーションがまだまだできていないと再認識した」学生もいた。リラックスしたことで、言語的コミュニケーションへの良い効果を感じ取り、自分自身のコミュニケーションを振り返る機会にもなっていた。

〈対象に触れる・集中する非言語的コミュニケーション〉

学生の「触れ合う手段によって患者との距離が縮まりやすい」、「手を当てると必要以上の会話をしなくても、マッサージに集中することで、非言語的コミュニケーションが図れているように感じた」、「タッチングし相手に集中した時間を共有する大切さを学んだ」等の記述から、対象へ触れる・集中する体験を通して非言語的コミュニケーションの大切さを実感していた。

〈緊張がほぐれ相互に癒される感覚〉

学生は、「ゆったりと話しマッサージをすること」で、または「マッサージを提供しながら患者の昔話に集中すること」で、「自分自身が癒された」、「自然に緊張がほぐれた」、「初対面の緊張もすぐにほぐれた」等と記述しており、学生自身が癒される感覚を感じていた。また、「患者の表情が和らぎ目を閉じている姿に本当に癒された」、「マッサージは一方的なものではなく相互に癒されていくものであるとわかった」という記述が示すように、対象へのケアを通して自分自身も癒しを受け取り、相互に癒し癒されていることを自覚していた。

2 【相手の反応を観て対象を理解すること】

このカテゴリは、〈香りとマッサージに対する対象の心身の反応を捉える〉、〈対象の感謝の言葉と快の反応を得られたケアをする喜び〉、〈対象のニーズの多様性への気づき〉という3つのサブカテゴリから構成された。

〈香りとマッサージに対する対象の心身の反応を捉える〉

「患者の心身への効果を実感した」、「患者にすることの可能性や効果を認識するきっかけになった」、「患者もリラックスしていた」、「末梢の血行促進や皮膚の潤いといった身体効果もあると感じてもらえた」、「言葉を思うように話せない患者の表情が和らいだ」、「表情が柔らかくなった方は香りとマッサージ、手で触れることでリラックスできたと思う」等の記述は、対象のアロマセラピーやアロママッサー

ジによる心身への反応をよく観察し捉えていたことを示している。

〈対象からの感謝の言葉と快の反応を得られ、ケアをする喜び〉

学生は、対象者から「ありがとう」と感謝の言葉をかけてもらい、また「気持ちよかった」、「とても気持ちよかった」、「手足が温かくなった」、「肌がしっとりした」等の対象の快の反応を得ることができ、「本当に嬉しく貴重な経験だった」と喜びを表現していた。

〈対象のニーズの多様性への気づき〉

学生が、「高齢の方が来てくれたことは嬉しい驚きだった」、「アロマセラピーは幅広い世代にアプローチできると知った」、「患者のみでなく職員や家族もいた」、「患者によってとにかく話したい方、気分が落ち気味の方など様々なため、様子を見て判断する必要がある」、「長時間関わるのが難しい家族の方々に対するケアが行えるのではないか」等と記述しているように、アロマセラピーを用いたケアに対して高齢者からのニーズがあること、そして対象者からの多様なニーズがあることを実感していた。

3 【相手に合わせた環境への気づき】

このカテゴリは、〈対象への接遇・心地よい雰囲気づくり〉というサブカテゴリで構成された。

〈対象への接遇・心地よい雰囲気づくり〉

学生は、「より患者をもてなす気持ちと態度で接することができた」、「心地よい雰囲気づくりが大切だと学んだ」、「患者に対する接遇を学んだ」、「ボランティア活動に向けての準備や練習を通して、サロンに来てくれた患者をいかにおもてなしするかを考える機会になった」等と述べており、看護学生にとって、実習と違う場での対象への接遇や心地よい雰囲気づくりを考える新たな学習機会となっていた。

4 【ボランティアの意味への気づき】

このカテゴリは、〈ボランティア活動をすることの喜び、感謝の気持ちを実感〉、〈ボランティア体験に初めて臨んだ思い〉、〈ボランティアという立場から得た学び〉、〈対象の生活に新たな関わりをもたらす活動〉、〈チームの一員としての自覚〉という5つのサブカテゴリから構成された。

〈ボランティア活動をすることの喜び、感謝の気持ちを実感〉

学生は、ボランティア活動をしたことに対し、「患者が少しでも気分が楽になってくれたらこんな嬉しいことはない」、「患者に喜んでもらうとすごく嬉しいというシンプルな喜びを感じた」、「ありがとう等の言葉をかけてくれ、本当に嬉しく貴重な経験だった」、「必ず皆さんに喜んでもらえるとても楽しみにして、必ず成功するという思いで参加した」、「誰かに何かをするだけでなく、ボランティア活動後の達成感や充実感を強く感じたという感謝の気持ちが大きかった」等と感じており、患者に喜んでもらうことで、達成感や充実感を強く感じ、感謝の気持ちを実感していた。

〈ボランティア体験に初めて臨んだ思い〉

学生のなかには、「人生初めてのボランティア活動だった」、「以前からボランティア活動をしてみたかった」等、初めてボランティア活動に参加したという学生や、「今年初めて患者にアロママッサージを提供した」、「患者に初めてアロママッサージをすることに緊張した」など、患者へ初めて行うボランティア体験に対する思いの記述があった。

〈ボランティアという立場から得た学び〉

「実習とは違う側面から患者や医療従事者、病院に関わることができたことは意義深い」、「多くの学びを得た」、「有意義な活動になったと感じる」などの記述から、学生は実習とは異なるボランティアという立場から、多くの学びを得ていた。

〈対象者の生活に新たな関わりをもたらす活動〉

学生は、ボランティア活動をすることで、「(対象者の)生活に新しいこととして良い変化の機会になるのではないかと」、「参加者にとっても新たな関わりができ、笑顔や温もりから学ぶことがある」などと感じていた。

〈チームの一員としての自覚〉

学生は、今回のボランティア活動を通して、「Dr、Ns、ボランティアなどの協力で成り立つ企画であると感じ、一員としての責任の自覚をもった」、「同じ目的に向かい協力し合う仲間の大切さを知った」など、ボランティア活動を行うチームの一員としての責任を自覚していた。

5 【自己の看護への動機づけ】

このカテゴリは、〈ボランティア経験をこれからの看護に活かす思い〉というサブカテゴリで構成された。

表1-1) ボランティア活動に参加して学んだこと

カテゴリ	サブカテゴリ	コード (学びの記述)
コミュニケーションの学び	リラックスが与える言語的コミュニケーションへの効果	実習よりも患者と短時間でより深いコミュニケーションがとれたと感じた。リラックスしたことで、普段より饒舌になった方も多と感じた。医療従事者でもアロママッサージのプロでもないことで、患者も話しやすかったと思う。自分自身のコミュニケーション(声のかけ方など)が、まだまだできていないと再認識した。手の形や指のツボの話の中から、患者が自ら「昔は〇〇を仕事として頑張ってきたんだ」と話してくれた。
	対象に触れる・集中する非言語的コミュニケーション	言語のコミュニケーションではなく、触れ合う手段によって患者との距離が縮まりやすいと感じた。手を当てると必要以上の会話をしなくても(力加減など)患者のマッサージに集中することで、非言語的コミュニケーションが図れているように感じた。アロマセラピーのボランティアでタッチングし、相手に集中した時間を共有する大切さを多く学んだ。
	緊張がほぐれ相互に癒される感覚	ゆったりと話しながらマッサージすることで自分自身が癒された。マッサージを提供しながら患者の昔話に集中することで、私自身が癒され人生の大先輩の話に励まされた。患者の表情が和らぎ目を閉じている姿に本当に癒された。アロマセラピーという手法を媒介に患者と関わり、初対面の緊張感もすぐにほぐれた。サークルメンバーと患者がリラックスしやすい雰囲気を作り、スペースにアロマの香りが舞うことで、自然に緊張がほぐれた。アロママッサージは一方的なものではなく、相互的なものであると学んだ。マッサージは決して一方的なものではなく、相互に癒されていくものであることがわかった。
相手の反応を観て対象を理解すること	香りやマッサージに対する対象の心身の反応を捉える	アロマセラピーやアロママッサージは治療や看護の観点から見ると、絶対に必要ではないかもしれないが、ボランティア活動で患者の心身への効果を実感した。アロマセラピーを患者にすることの可能性や効果を認識するきっかけになった。患者もアロマの香りやマッサージの刺激でリラックスしていた。患者には単に香りやマッサージのリラックス効果だけでなく、末梢の血行促進や皮膚の潤いといった身体的効果もあると感じてもらえた。4人のうち1人は疾患の影響で言葉が思うように話せなかったが、マッサージを通して患者の表情が和らいだ。実施後、表情が柔らかくなった方がいたのは、香りやマッサージ、何より手で触れることでリラックスできたのではないかと思う。
	対象から感謝の言葉と快の反応を得られ、ケアする喜び	男性と女性と計4人の方を担当し、「気持ち良かった」等の言葉をかけてくれ、本当に嬉しく貴重な経験だった。マッサージを終えて、「とても気持ち良かった」「ありがとう」という言葉が多かった。「手足が温かくなった」「肌がしっとりした」という言葉ももらえた。
	対象のニーズの多様性への気づき	比較的高齢者の方が多いと聞いてアロマセラピーに興味をもってもらえるか不安だったが、「楽しみにしていた」と言ってスタート前から並んでくれ、高齢者の方も来てくれたことは嬉しい驚きだった。高齢者の患者にも受け入れてもらえるを知り、アロマセラピーは幅広い年代にアプローチできるのだと知った。利用者の中には患者のみではなく、職員や家族もあり、普段アロマセラピーに触れる機会のない人など様々であった。患者によってマッサージを楽しみたい方、とにかく話したい方、気分が落ち気味の方など状況が多様のため、様子を見てどうするか判断をしていく必要があると感じた。ボランティアとして活動することで、利用する方が気軽に参加でき、普段、長い時間関わるのが難しい家族の方々に対するケアが行えるのではないかと感じた。
相手に合わせた環境への気づき	対象への接遇と心地よい雰囲気作り 患者に対する接遇も学べた。治療とは違った方向からのアプローチだったため、より患者をもてなすという気持ちと態度で接することができた。アロママッサージを提供するときには、心地よい雰囲気づくりが大切だと学んだ。ボランティア活動に向けての事前準備や練習を通して、ほっとサロンに来てくれた患者をいかにおもてなしするかを考える機会になった。	

表1-2) ボランティア活動に参加して学んだこと (つづき)

カテゴリ	サブカテゴリ	コード (学びの記述)
ボランティアの意味への気づき	ボランティア活動をすることの喜び、感謝の気持ちを実感	患者が私たちと話すことで、少しでも気分が楽になってくれたらこんな嬉しいことはないと感じる。 自分が何かをすることで、患者に喜んでもらうとすごく嬉しいというシンプルな喜びを感じた。 男性と女性と計4人の方を担当し、「ありがとう」等の言葉をかけてくれ、本当に嬉しく貴重な経験だった。 アロマサークルによるアロマハンドマッサージのボランティアは、必ず皆さんに喜んでもらえることとても楽しみにして、必ず成功するという思いで参加した。 ボランティア活動は誰かのために何かをするだけでなく、活動後の達成感や充実感を強く感じたという感謝の気持ちの方が大きかった。
	ボランティア体験に初めて臨んだ思い	1年次からアロマサークルに所属し、今年初めて患者にアロママッサージを提供した。 今回の活動が人生初めてのボランティア活動だった。 人生初めてのボランティア活動だった体験を看護師になった後でも活かしていけるように広く関心を持ち続けたい。 以前からボランティア活動を試みたいと考えていたが、一人では行動に移せなかった。 サークル活動に参加して、以前から参加したかったボランティア活動の機会を得ることができた。 患者にアロマセラピーをすることに緊張した。 患者に対して初めてアロママッサージを提供したので緊張した。
	ボランティアという立場から得た学び	アロマボランティア活動に参加し多くの学びを得た。 学内の生徒間の実施だけでは気づけなかったことに気づいた。 実際にマッサージを行う中でも学んだことが多くあった。 実習とは違う側面から患者や医療従事者、病院自体に関ることができたことは意義深いと思った。 アロマハンドマッサージをした患者やボランティアの方、病院の先生にも喜んでもらえ、病棟看護師からも是非連れて行きたい患者がいるとの声も聞き、有意義な活動になったと感じる。 ボランティア活動に参加することで、実習とは異なる患者との触れ合いの時間をもつことができた。
	対象者の生活に新たな関わりをもたらす活動	短い時間であったが、普段と違う人や環境で癒しを目的とした活動をすることで、生活に「新しいこと」として良い変化の機会になるのではないかと感じた。 参加者にとっても新たな関わりができ、笑顔や温もりから学ぶことがあると感じた。
	チームの一員としての自覚	Dr、Ns、ボランティアなどの協力で成り立つ企画であると感じ、一員としての責任の自覚をもった。 同じ目的に向かい協力し合う仲間の大切さを知った。
自己の看護への動機づけ	ボランティア経験をこれからの看護に活かす思い	今後の実習や看護師になってからの看護に活かしたい。 今後、自分が看護師として働く中でも今回の経験を忘れず活かしていき、患者に寄り添っていきたい。 人生初めてのボランティア活動だった体験を看護師になった後でも活かしていけるように広く関心を持ち続けたい。

〈ボランティア経験をこれからの看護に活かす思い〉

学生の、「今後の実習や看護師になってからの看護に活かしたい」、「看護師として働く中でも今回の経験を忘れず活かしていき、患者に寄り添っていきたい」、「看護師になった後でも活かしていけるように広く関心を持ち続けたい」等の記述が示すように、このボランティア経験を学生自身の今後の看護に活かしたいという思いが感じられた。

VI 考察

アロマセラピーを用いたボランティア活動に参加した看護学生の「学び」を分析した結果、【コミュニケーションの学び】、【相手の反応を観て対象を理解すること】、【相手に合わせた環境への気づき】、【ボランティアの意味への気づき】、【自己の看護への動機づけ】の5つのカテゴリに分類された。コミュニケーション、対象の理解、対象のための環境調整に関する学びは、看護を実践する上で、基盤となる重要な要素である。今回のボランティア活動が、学生

の看護実践力を高めるための良い体験となり、看護を学ぶ動機が強化されていたことが明らかになった。

今回の学生の学びの中で、1 “触れる”体験からの学び、2 実習とは異なるボランティア体験からの学びについて考察する。

1 “触れる”体験からの学び

今回のボランティア活動では、アロママッサージを用いて対象に手で“触れる”という非言語的コミュニケーションによって、学生の緊張がほぐれ癒されることで対象との距離感が縮まり、学生の対象理解がさらに深まっていったことが明らかとなった。

川島¹¹⁾は、「人権と安全性、安楽性を踏まえた上で、その人固有の自然治癒力に働きかけるのが看護の原点であり、その具体的な手法の第一歩が看護師の手を用いたケアである」と述べている。川島は、その方法の一つとして、コミュニケーションとしてのタッチを行うことを勧めている。その具体的な方法は、「看護学生たちに自然にコミュニケーションをとってもらう方法として、患者の傍に行き『脈をとらせてください』と言ってその手を軽く支えて脈を取り、その後、手を静かにマッサージすること」¹²⁾であるという。川島が述べているような意図的タッチを行うことで、患者は安心感をもち、学生自身の緊張もほぐれ、双方向的な良いコミュニケーションを促進すると考える。

今回の分析結果においても、学生が行った「手を用いたケア」（アロママッサージ）が、患者との良いコミュニケーションへと結びついていたことがわかる。例えば、「触れ合う手段によって患者との距離が縮まりやすいことを感じた」、「会話をしなくても（力加減などで）患者のマッサージに集中することで非言語的コミュニケーションが図れているように感じた」、「マッサージは決して一方的なものではなく、相互に癒されていくものであることが分かった」等の記述からわかるように、学生は「手を用いたケア」によって非言語的コミュニケーションを深めることができ、学生は手で“触れる”力の加減で対象を感じ取り理解していったと考える。学生の「リラックスすることで饒舌になった方も多い」の記述からわかるように、手で“触れる”ことで、対象の言語的コミュニケーションも豊かになっていったと考える。学生が対象から受け止めた感覚と、対象の言語的・非言語的反応が、相互に交流すること

で、学生自身が「癒された」という感覚をもち、学生の対象への理解がさらに深まり、ケアを提供しようとする思いが強くなり、相互に癒される関係が築かれたのだらうと考える。今回の看護学生は自主的に行った“触れる”体験を通して、患者や家族と対等に向き合い、感情豊かに生き生きとコミュニケーションを図ることができていたことが窺える。

最近の看護学生の中には、臨地実習での緊張感が強く、コミュニケーションがうまくいかない者が多く見受けられる。渋谷¹³⁾は、臨地実習における看護学生の意図的タッチの活用状況を調査し、患者とのコミュニケーションの手段として意図的タッチを活用していない学生の理由が、「触っていいのかという気持ち」や「手を出すことに自信がなかった」等であり、学生に“触れる”ことへの躊躇いがあると述べている。しかし、今回のボランティア活動における学生達には躊躇いは見られず、むしろ“触れる”体験によって、初対面の緊張がほぐれ対象と良い関係が築かれていた。

Synder¹⁴⁾は、『心とからだの調和を生むケア』の中で、意図的タッチについて、「タッチを適応する前に十分アセスメントし、タッチに関連した文化的差異を認識しておく必要がある」と述べている。今回の学生たちは、自主的にボランティア内容を企画し、学内のサークル活動で相互にハンドマッサージ体験を行っていたことや、アロマセラピー認定看護師による接遇や注意点の事前の説明とアロママッサージの事前練習に参加し、十分な準備を行っていた。そのため、当日は初めから主体的に行動でき、学生が患者に触れることへの抵抗が少なかったのだらうと推察される。つまり、今回のボランティア活動の“触れる”という体験が、学生にとって重要な学びとなっていたと考えられる。

2 臨地実習とは異なるボランティア体験からの学び

今回、ボランティア活動に参加した学生は、初めてのボランティア体験だった者が多く、臨地実習とは異なる「ボランティア」という体験をしていた。学生の記述からは、「ボランティア」に対する多くの気づきが読み取ることができた。学生は、ボランティア体験によって、活動後の達成感、充実感をもつことができ、「患者に喜んでもらうと自分も嬉しい」という喜びを共有する体験が、看護者として対

象をケアすることへのモチベーションを高め、看護の学習への動機づけが強化されていたものと考えられる。

米田¹⁵⁾のボランティア経験のある看護学生とボランティア経験のない看護学生とを比較した研究では、「ボランティア経験のある看護学生のほうがボランティア経験のない看護学生に比べ協働作業認識が高かった」と報告されている。今回の学生の学びの中に、「Dr、Ns、ボランティアなどの協力で成り立つ企画であると感じ、一員としての責任の自覚をもった」、「同じ目的に向かい協力し合う仲間の大切さを知った」という記述があった。今回のボランティア活動によって、学生がチームの一員としての責任感を自覚したことは、米田が述べるような協働作業認識を自覚し、学生の社会性（連帯性）の育成に結びついたと考える。

以上のことから、今回の看護学生のボランティア体験は、看護学生にとって、看護の基盤となるコミュニケーションを豊かにし、対象の理解を深め、看護への動機づけを強化することに繋がった。さらに、看護学生の自主性や社会性というボランティア精神の一面を育成していたことが示唆された。看護教育では、看護学生が教育カリキュラム以外のボランティア活動等を通して学ぶ際には、学生の自主性や社会性を育てるため、学生の意思を尊重しながら、後方で支援し見守ることが重要であると考えられる。

Ⅶ 結論

アロマセラピーを用いたボランティア活動に参加した7名の看護学生の「学び」の内容を分析した結果、以下のような結論を得た。

- 1 看護学生の「学び」は、【コミュニケーションの学び】、【相手の反応を観て対象を理解すること】、【相手に合わせた環境への気づき】、【ボランティアの意味への気づき】、【自己の看護への動機づけ】の5つのカテゴリに分類された。
- 2 看護学生は、“触れる”体験を通して、対象とのコミュニケーションが豊かになり、対象と相互の関係を築くことができ、“触れる”という体験から重要な学びを得ていた。
- 3 看護学生は、ボランティア体験を通して、チームの一員としての責任感を自覚し、協働作業の意識の向上に繋がった。看護学生の自主性や社会性というボランティア精神の一面を育成していたことが示唆された。

Ⅷ 研究の限界と今後の課題

本研究結果は、アロマセラピーを用いたボランティア活動に参加した看護学生7名を対象と実施したアンケートを分析したものである。少数の限られた看護学生を対象とした研究として、限界はあるものの、学生達の「手で触れる」ボランティア体験からの学びは大きかった。今後は、看護学生のボランティア経験の有無や学年差などによる「学び」の違いや、ボランティアの対象者へ与える影響等も明らかにしていきたいと考える。

謝辞

本研究にご協力いただいたA看護短期大学の学生の皆様に深く感謝いたします。

引用・参考文献

- 1) 厚生労働省ホームページ (http://www.mhlw.go.jp/shingi/2007/12/dl/s1203-5e_0001.pdf). 「ボランティア活動について」. (2015年10月31日現在)
- 2) 奥山みき子他. 三重県立看護大学生のボランティア活動に関する調査報告. 三重県立看護大学紀要. Vol.14, 2011, p59-67.
- 3) 中川杏奈他. 継続した被災地でのボランティア活動が現地の人々や看護学生に与える影響. 日本看護学会論文集 (看護教育). Vol.45, 2015, p71-74.
- 4) 宮城眞理他. 緩和ケア病棟実習中のボランティア体験から看護学生が学んだこと. 日本看護学教育学会誌. Vol.24, No.3, 2015, p101-110.
- 5) 小泉由美他. 地域の高齢者ボランティアを導入した高齢者のヘルスアセスメント演習の評価. 看護実践学会誌. Vol.26, No.1, 2014, p82-92.
- 6) 吉村恵子他. 障害児サマーキャンプにおけるボランティア看護学生の学び. 小児看護. Vol.34, No.5, 2011, p666-672.
- 7) 同掲書 3) p73.
- 8) 同掲書 1) 厚生労働省ホームページより.
- 9) 藤田久美. 大学生のためのボランティア活動ハンドブック. ふくろう出版, 2008, p3-5.
- 10) Wikipedia フリー百科事典. ja.wikipedia.org/wiki/学び. (2015年10月31日現在)
- 11) 川島みどり編. 触れる・癒やす・あいだをつなぐ手－TE-ARTE学入門－. 看護の科学社, 2011, p7.
- 12) 同掲書 11). p10.
- 13) 渋谷えり子. 臨地実習における意図的タッチの活用状況と教育の課題. 埼玉県立大学紀要. 13, 2011, p67-72.
- 14) Mariah Synder. 野島良子・富川孝子監訳. 心とからだの調和を生むケア. へるす出版. 1999. p119-127.
- 15) 米田照美他. 看護学生の協同作業認識と大学生活の経験との関連性. 人間看護学研究. No.13, 2015, p29-34.

